講 演 要 旨　平成 19 年度東海地区大学図書館協議会「図書館職員基礎研修」(2007.11.28)

アメリカの研究図書館　歴史と現状

中部大学附属三浦記念図書館
松　林　正　己

アメリカ図書館界の豊かさと多様性を説明するには、様々な切り口すなわち側面からアプローチが可能である。本稿では主としてアメリカの高等教育を支える研究図書館を中心に紹介したい。

研究図書館とはなにか？

アメリカで〈研究図書館（Research Library)〉と呼ばれる機関が加盟する組織が現在３つある。最大組織はアメリカ図書館協会（American Library Association: ALA）傘下の〈大学研究図書館協会（Association of College and Research Libraries: ACRL)〉[1]で、機関と個人会員によっても構成される。二つめは〈研究図書館協会（Association of Research Libraries: ARL)〉[2]で、米国議会図書館（以下 LC）を筆頭にアメリカの主要な研究（＝大学院）大学の図書館が加盟する。国立図書館はその国の出版物を包括的かつ網羅的に収蔵する関係で研究図書館機能を必然的に従属させる。加盟館で LC 以外にも高等教育に直接は関わらないニューヨーク公共図書館も加盟している。資格はアメリカの高等教育機関を10種類に分類したカーネギー高等教育機関分類表（The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education™)[3]で、上位クラス博士課程研究大学（Doctoral/Research Universities）に属し、15 以上の博士課程（専門領域）をもち、全学で毎年 50 名以上の博士学位を授与している大学の図書館が、審査を経て、加盟を認められ、年会費２万ドルを納める。ARL は研究図書館の品質を審査し、研究大学の知的資源の品質維持と提供されるサービス品質に関わる国際的な評価指標の維持を使命にしている。見方によれば ARL は研究大学の名門クラブのような存在である。三つめは、独立した研究図書館が加盟する〈独立系研究図書館協会（The Independent Research Libraries Association: IRLA)〉[4]がある。この協会は 1972 年に ARL から分離・独立した組織である。IRLA 加盟の図書館は教育機関ではないために、ARL の評価基準に馴染まないために発足した。

洗練された図書館をいくつ見学しようとも、サービスの品質を精確に理解するには、使ってみないかぎり、実感できない。アメリカで研修を受けるだけでは、図書館の強さや豊かさを実感しにくい。それは運営の基盤が見えないからである。たとえば、洗練されたサービス品質格差の幅が、アメリカの場合狭い。それは研究図書館として品質を戦前から競って、整備してきた蓄積があるからだ。競争にあたっては、ARL の評価基準が利用され、高品質のサービスを提供できる水準なり標準が暗黙に存在する。その基準は学術情報としての扱い方であり、ANSI や NISO の標準規格としてマニュアル化されてはいない。ARL の年次図書館統計書では、蔵書冊数など基本的な 18 種類の数値が比較されているに過ぎない。逐次刊行物ならば所蔵状況を欠号状況応じてポイント制で採点して、定性的な評価値に変えて測定したり、目録品質を LC の目録データを基準（LC の目録データは絶対的な存在で、専門職(プロフェッショナル)キャタロガー以外修正作業はできない）に品質を評価、図書館経営上は専門的な基準が設定されて、競争原理が働いている。それらを紹介する紙幅はないので、研究図書館の有機的なつながり方を中心にする。読者諸賢が将来旅行や出張で、その地を踏まれる可能性の高いニューヨークを事例にして始めよう。

日本で一番知名度のあるアメリカの図書館は、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library: NYPL）ではないだろうか。それはこの図

書館正面の光景と三階のローズ閲覧室の映像で始まる『ゴーストバスターズ』で､その存在を知られ、現在でも愉快で楽しい映画として知られているからだ。アメリカについてあまり知らない人でも「アメリカの図書館といえば、ゴーストバスターズに出てくる・・・」と云われるくらいだ。NYPL については菅谷明子著「未来をつくる図書館」[5] に詳細な報告があるし、拙著[6] でも紹介したので、是非参照願いたい。

NYPL の図書館文化を地道に支えるとともに文化的成熟の象徴として Library Way [7] と名づけられた通りが 41 丁目にある。歩道には図書館文化に相応しい名句名言を刻んだ銅板はめ込まれ、人々を楽しませている。銅板モニュメントを寄贈しているのは、近くのグランド・セントラル・ステーションが関わる財団で、マンハッタン最大の繁華街で活動している諸機関が構成する。いわば NYPL は地元でも最大の支持を得ていることを証明した文化事業なのである。Library Way に刻まれた名句を一つご紹介しよう。いずれも名文句で、エピグラフなどに引けそうなものが多い。たとえば「情報は光、情報それ自体、何かの光（Information is light, Information, in itself, about anything, is light.）」著者は映画脚本家で映画監督でもある Tom Stoppard（1937－）が著書 Night and Day [8] の中で記した一文章である。なかなか哲学･文学的名句ではないか？こうした名文が 96 枚も歩道に埋め込まれていることになっており、読んで歩くだけでも楽しい。残念ながら不心得者はどこにもおり、読めないものがかなりあるように思われる。

この歩道に面して、ブックオフが店開きしているのを 2006 年秋に見つけて仰天した。日本の古書店文化を挑発する存在だが、アメリカの書籍文化の殿堂 NYPL 本館前での営業は果敢な挑戦にも見える。アメリカの書店文化は日本以上に健全で豊かある。図書館員並みに書誌情報精通してレファレンスのできる人も多い。ただの安売りで日本の古書価格を破壊した商法が、アメリカでどのように受け入れられるであろうか？実に興味深い。

アメリカの図書館文化を牽引するニューヨークの歴史

ニューヨークの図書館文化が豊かになった背景には、ニューヨークがアメリカの経済を牽引している歴史がある。象徴的な歴史として世界最初の「図書館長会議（Librarians' Convention）」が 1853 年 9 月 15－17 日に開催され、この会議は図書館雑誌としても世界で最初に刊行された「ノートン文献彙報（Norton's Literary Gazette）」を出版していたチャールズ・B・ノートンらが企画し、議長にスミソニアン研究機構図書館長のチャールズ・ジュエット（Charles Coffin Jewett, 1816－1868）が収まり、事務局にイェールとハーヴァードを修了したばかりの少壮気鋭ダニエル・コイト・ギルマン（Daniel Coit Gilman, 1831－1908　ALA 永久会員　後にジョンズ・ホプキンス大学初代学長）も参加していた。図書館を近代の知的営為として社会的に制度化した会議で、のちには ARL の起源としてその名を残す。参加者は 13 州から 82 名である。会議の大きな成果は､総合目録､現在の「全米総合目録（National Union Catalog: NUC）」に相当する提案がなされたこと（19 世紀に実現はしていないが、この事業を引き継いだのは ARL と LC である）とワシントン DC に事務局をおく図書館協会設立構想が提案されたことである。この会議は毎年定期的な開催を予定されたが、経済不況と南北戦争のために、1876 年にフィラデルフィアでの ALA 設立までは、中断されたままであった。

私設図書館の興隆：その遺産と伝統

NYPL 以外にも私設図書館として著名な図書館がある。マンハッタンには 19 世紀から富豪が多く住んでいたため、さまざまなコレクターがいた。収集されたのは書物、絵画から骨董などの諸美術品まで多岐にわたる。メトロポリタン美術館などの収蔵品は彼らコレクターたちの遺産が寄託され、公開されたものである。寄託せずに私設機関として知的財産を公開している図書館や美術館も多数ある。

マンハッタンの観光スポットとして一番人気のある図書館博物館では、印刷文化の至宝グーテン

ベルク聖書３セットを所蔵するモルガン図書館博物館（The Morgan Library & Museum）である。エドガー・アラン・ポーやジェーン・オースティンらの手稿などオリジナリティの高い原稿等を多数所蔵し、楽譜も世界で無二のものばかりである、モーツアルトの「ハフナー」を筆頭に、シューベルト、バッハ、マーラー、ベートーベン、シェーンベルクなどの作曲家の自筆譜を展示している。すべて研究利用に応じている。2006 年 4 月に３つの図書館博物館をつなぐ増築・リニューアル工事を世界的な建築家レンゾ・ピアノ（Renzo Piano）が竣工させ、大きな話題となり、ニューヨーク・タイムズなど新聞でも竣工を報道している。この図書館は全米史蹟の指定を受けている IRLA の加盟館である。NYPL に較べると小さな図書館・博物館であるが、コレクションの品質は ARL 加盟の図書館でも比肩できない貴重な資料を上述のとおり多数所蔵し、研究図書館としての品質を語っている。

ブロードウェイの劇場街を中心にカーネギー・ホール、メトロポリタン歌劇場を中心にしたリンカーン･センターにはジュリアード音楽院、ニューヨーク公共図書館パフォーマンス芸術研究図書館や 20 を越す劇場・ホールが集積する。モルガン図書館からリンカーン・センターまでは歩いても 20 分位で、マンハッタンの豊かな芸術環境がわかろう。パフォーマンス芸術を教育から創作、実演と鑑賞までの一貫体制を備えているのがマンハッタンであり、それを知の記憶装置として維持・保管しているのが図書館（北米の大図書館は、活字資料とともにアーカイヴズや博物資料を多数所蔵している。英語圏では博物館、図書館とアーカイヴズ三者の関係を、頭文字をとって MLA と呼ぶ）で、それを見事に実践している。過去の偉大な手稿楽譜を保存するのがモルガンならば、かつて上演された作品を映像、衣装やシナリオとして保存しているのが NYPL パフォーマンス芸術図書館で、展示エリアで旧作をビデオ上演し、衣装や楽譜を展示して、利用者を楽しませる。

図書館を築いたモルガンもカーネギーと親交があり、図書館の意義を親子２代で知悉していた。初代館長は黒人女性のベル・ダ・コスタ・グリーン（Belle da Costa Greene）で、西洋書誌学に造詣が深く、モルガンの絶大な信頼の下に資料の選択を担当していた[9)]。

モルガン図書館博物館、NYPL パフォーマンス芸術図書館、そしてジュリアード音楽院の図書館に加えて北には全米屈指のコロンビア大学バトラー図書館、南にはニューヨーク大学ボブスト図書館があり、パフォーマンス芸術を中心にクラシック音楽研究や文学研究には実に豊かな資源を調査、体験、検証できる環境を完備した〈島〉である。それも手稿、印刷媒体、視聴覚資料等、音楽研究には必須のあらゆる媒体を駆使でき、実際に音楽では最大の価値を持つ〈音源〉それ自体を隣接のホールで鑑賞・体験できるまさに活きた空間がマンハッタンの研究図書館自体を構成している稀有な街でもある。

高等教育における研究図書館の出現

高等教育における研究図書館の成立は、研究大学の成立とともにある。この前提で図書館史を振り返るとジョンズ・ホプキンス大学の存在が浮かび上がる。ジョンズ・ホプキンスは 1876 年建国百周年に開学する。

大学図書館は大学の使命（ミッション）遂行のためにあるが、アメリカの研究大学のように、在学生の大半が大学院生で、学部生が 10％前後の大学と日本のように逆に学部生が大半で、院生が 10 ～ 20％の大学制度では図書館のコレクション内容が自ずと異なる。

研究大学の嚆矢ジョンズ・ホプキンスの初代学長ギルマンの図書館長としての実績を調査していると、イェールの図書館を自ずと、彼が館長を務めていたため、調査せざるを得ず、昨年から調査を開始した。そこでイェール大学の模様をお話しよう。キャンパスは 18 世紀からゴシックをベースにした建物で統一されている。誇ってきた学部生向け図書館 Cross Campus Library を改装（リノヴェーション）して、Bass Library を設計するさいにも、ゴシックに馴染むものが要求され、既製品を使わずに特注の調度品で見事である。ゆえに内部の雰囲気は地

味だが、数十年後には使い込まれて、本館スターリング記念図書館との風景や雰囲気から違和感がない。近代建築を決して排除している訳ではない。ルイス・カーンが設計した美術館が二つもあり、美術館は19世紀までは図書館の一部であった。20世紀にスターリング本館が竣工してから、美術館を関係学部の建物に移管した。スターリング図書館もゴシック基調である。典型的デザインは新聞室を飾る象嵌のような細木細工はまさにゴシックの真髄で、現代では滅多にお目にかかれないので感動する。中庭も中世ヨーロッパの館を思わせる佇まいで、落ち着いていて野外での読書に適した雰囲気がある。その中庭に面した東側の建物が、アーカイヴズを閲覧する手稿・アーカイブズ部である。調査の合間にイェールの同僚諸氏の配慮で見学した分館の専門（主題別）図書館を紹介しよう。

写真１　正面がスターリング記念図書館で、芝の下に Bass Library がある。

まず新聞室の隣にある音楽図書館は数年前に中庭に屋根を張り、その下に増築されたもので、あたかもドーム閲覧室のように天井の高い部屋である。２階部分が楽譜書架と閲覧室、１階部分は音楽資料の CD などを聴くブースとピアニカまでおいている。

２階以上の研究図書館は、学外者は原則的に利用できない。そのなかに東アジア図書館もある。東アジア図書館は、閲覧席の仕切りに障子をアレンジして、雰囲気の演出が工夫されている。東アジア図書館と呼ばれるとおり収蔵している資料は、CJK すなわち中国、日本、韓国語の資料が直接閲覧できる。東アジア図書館設置に向けて、北米で最初に尽力したのは朝河貫一（1873－1948）イェール大学教授である。アナール学派とも交流のあった世界的な歴史学者で、主著は邦訳されているので、詳細な紹介は割愛する。朝河は東アジア図書館設立にさいして、ギルマンに助言を求めたが、ギルマンは素っ気ない返事を送ったらしい。

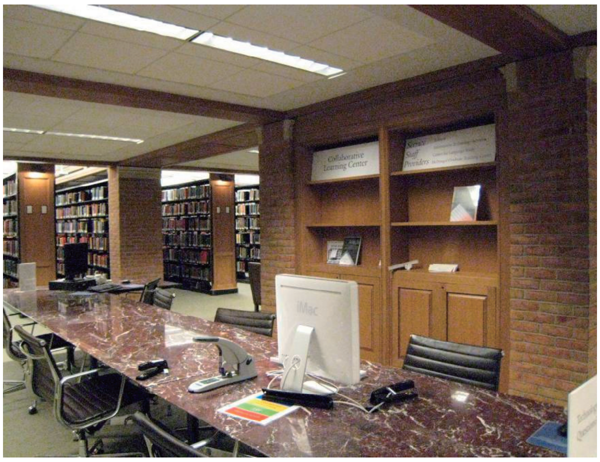

写真２　ラーニング・コモンズ Collaborative Learning Center

２階の一室には、アメリカでは国宝級のコレクションがある。ベンジャミン・フランクリン文書編集室（The Papers of Benjamin Franklin）である。かつてフィラデルフィアの図書館組合（Library Company of Philadelphia: LCP）を訪ねた経験から、見学を申し出ると快く案内してもらえた。本来ならば LCP が行うべきベンジャミン・フランクリンの書簡アーカイヴズをイェール大学が保存・共有（他機関所蔵の文書は複写で所蔵。すなわち新たな書簡などが見つかれば、複写物で入手、保存し、著作集の改訂追加原稿となる）し、著作集 The Papers of Benjamin Franklin の改訂作業を続けている。まさに研究図書館の典型である。「なぜイェールにあるのですか、LCP じゃなくて？」と尋ねると「これは卒業生のコレクターが寄贈してくれたのです」と明快な返事を頂けた。歴史を保存するのは図書館や博物館のみならずコレクターが実に大きな役割を果たしている。個人所有に限

界が来れば、コレクションに相応しい委託または寄託機関として大学図書館が選ばれるべきである。

LCP も思いつきで突然訪問したが、同僚ということで副館長のマン（Mann）さんが最重要な書庫をわざわざ案内してくださった。私がオハイオ大学のアセンズでキャタロガーをしていたというと、昨日会った人はアセンズの公共図書館長に就任するために挨拶に来た「これも縁だね」と感慨こめて話された。図書館人の同僚は、どこでもお互いに友愛に満ちた関係が維持できる実に貴重な職業である。

最後は稀覯本収集で世界的に著名で、図書館建築としても有名なバイネッキ稀覯本手稿図書館（Beinecke Rare Book & Manuscript Library）[10] に登場願おう。壁が大理石板で、太陽光を通し、書庫が展示部から見える独特の雰囲気の空間となっている。バイネッキは、日本と稀覯本に関する意義の見出し方が違い、多いに勉強になる。「活用されない資料は、価値がない」という初代アメリカ図書館協会会長ジャスティン・ウィンザー（Justin Winsor, 1831－1896）の名言は生きている。たとえば、サマー・セッションでは、高校生にまで稀覯本を使ったシェイクスピア研究講座などが開かれ、稀覯本を活かした保存と活用を進めている。これを見ても教育品質の厚さをどのように評価すべき、を考えるべきであろう。こうしたバイネッキの活動を教えてくださったのは、稀覯本閲覧部で唯一の日本人女性スタッフだった斉藤さんで、一昨年の春先に逮捕された古地図泥棒の発見者でもある。この事件は日本でも新聞報道されたし、ニューヨーク・タイムズは実に詳細な報道をしている。

ARL の歴史的展開

研究図書館の現状を北米レヴェルで理解するには、ARL の歴史的経緯やその活動を知らずしては理解が深まらない。HP を見れば、年表など歴史的経緯や成果を説明した文書が掲載されてはいるが、歴史的な因果関係や意味は判りにくい。幸いにも LC 職員で、ARL の歴史を博士論文として執筆した人がいる。LC 海外事務所に在籍したマックゴワン博士で、ARL の図書館史を LC に寄託された ARL 文書をもとに創設から 40 年後の 1970 年代までを記述している。本論文は 20 世紀アメリカの研究開発体制に研究図書館とその協会が如何に連携したかを実証した壮大なパノラマである。

マックゴワンは研究図書館の定義を最初に試みる。研究図書館の類似概念を整理し、i) Reference library、ii) Research library、iii) Scholarly library を峻別、自らの定義として「研究図書館は探究（investigation）を推進可能にする図書館で、探究対象の重要な（critical）あるいは科学（学問）的で、体系的な探究に関わる情報を提供する要素を備えていること」と述べている。

アメリカ社会における研究大学

では研究大学（The Research University）は、アメリカではどのような社会的評価を得ているのであろうか？アメリカ社会史百科事典によれば、第二次世界大戦以降に研究大学のある街では「最大の無煙産業（the largest smokeless industry）」として地元経済の牽引車として大きな役割を果たしているのが共通している。私が最初に仕事をしたオハイオ大学のあるアセンズでも最大の雇用機関で、ボルティモア市内にはジョンズ・ホプキンスはメリーランド州最大の雇用機関と謳った広告が随所に見られる。

ジョンズ・ホプキンスの果たした役割

建国百年 1876 年に ALA の設立と同年に開学するジョンズ・ホプキンスは、当初研究用参考図書を主にヨーロッパで 6000 冊強を買い付けて開館する。研究対象資料の不足を相互利用（ILL）で補完する体制は、準備段階から構想されている。

また大学の知的成果を公表する手段として、大学出版（University Press）や各種学会を学内にいち早く誕生させ、アメリカの科学研究における学術情報流通（Scholarly communication）という盤石を固めたのもジョンズ・ホプキンスである。アメリカ化学会（American Chemical Society : ACS）

や近代言語学会（Modern Language Association : MLA）の基盤を設立し、のちに独立させている。ARL 創立の使命に含まれる学術情報流通はジョンズ・ホプキンスによって当初整備された。

研究大学設置ブームと ARL への道

研究大学設置ブームで 1900 年には 150 機関で大学院が開講、同年に学位を授与された 90％が 14 機関に集中し、アメリカ大学協会（Association of American Universities）を形成して、それらは ARL の中核となった。それらはカリフォルニア大学（バークレー）、シカゴ、コロンビア、ハーヴァード、ジョンズ・ホプキンス、アメリカ・カトリック大学、クラーク、コーネル、ミシガン、ペンシルヴァニア、プリンストン、スタンフォード、ウィスコンシンとイェールである。これらの図書館長が中心に ARL 設立運動が始まる。

ALA 大学参考図書館部門（College and Reference Section: CRS）の主要メンバーが同部門の活動に満足できず、５年以上の打ち合わせを経て創設を準備した、とマックゴワンは指摘している。その創設は当時高騰を重ねたドイツの学術雑誌をアメリカで継続講読を可能にする体制を整え、学術情報資源の確保が目的で、最初の提案者は定かではないが、アーカイヴズによれば 1928 年 CRS 年報創刊の前年である。つまり世界恐慌直前に設立運動が起こり、本格化するのは金融恐慌が回復した３年後に再開している。

創設のための事前調査のあと 1932 年 1 月 22 日の ALA 総会（シカゴ）で 42 の図書館に設立趣意書が送付された。図書館の蔵書と館長個人の資格という条件であった。

創設に関わったメンバーは、ALA 活動委員会（the Committee on ALA Activities）のナザン・ヴァン　パッテン（スタンフォード）の「分離した大学図書館組織が必要ではないか」（1931 年 ALA 総会で発表）という発言を容れて、ジェイムズ・T・ジェロルド（プリンストン大学）らが調査研究して、創設案をとりまとめた。

案の要点は次の６点である。

１　研究図書館協会と呼ぶべき組織の発足を勧告する。機関主導でアメリカ大学協会に属し、一部は大規模公共参考図書館（the larger public reference libraries）で構成され、他の機関は選出により加盟を認める

２　ALA とは一線を画した組織で、下記の性格をもつ組織とする。

完全な独立機関

全米法律図書館協会に比肩し、アメリカ図書館協会とも通じた組織

アメリカ図書館協会からは独立したセクション

大学およびレファレンス部会からは独立した部会

３　ALA 年次総会開催時の総会と他にも別の学術団体の年次総会開催時に合わせる

４　参加者資格　館長　副館長　部門長

５　定型プログラムは直接議論可能なものは対象外　但し議長が継続議論を認めたものは除外

６　年度単位で議長と監事を選出する

創設案の内容に関して、6 項目中 5 項目が 33 図書館から承諾された。事務局は持ち回りで、協会運営には諮問委員会があることになった。初代事務局長にはロチェスター大学のドナルド・ジルクリストが５年任期で就任。意思決定機関である諮問委員会には、クレラー図書館の J. クリスティアン・ベイが２年任期、プリンストン大学のジェイムズ　T. ジェロルドが３年任期、カリフォルニア大学バークレーのハロルド L. ロイプが４年任期、さらにコロンビア大学のウィリアムソンが５年任期で就任した。

ARL の特徴は会員制（メンバーシップ）で組織され、会員資格を得るには条件が定められていた。この会員制が ARL の最大の長所でもあり、短所でもあった、とマックゴワンは述べて、以前には「大変な俗物クラブと誇られプロとはいえない行動に満ちていた」というエピソードを紹介している。

加盟には会員資格審査が必要であり、それには CRS が刊行した College and Reference Library Yearbook（1929 年創刊 31 年廃刊）に掲載されている図書館統計によるランキング表によっていた。会員は公募されず、ランキング表から諮問委

員会がノミネートし、会員投票で承認あるいは不可を投票用紙に記入して、集計し可否を認定するというまるで秘密結社なみの決定であった。現在毎年公表されている ARL 統計表は、こうした歴史を経て 60－70 年代に様々な改革を行なわれた。2004 年に創設メンバーであるスタンフォードが脱退し、RLG（Research Library Group）は OCLC に委託された。ARL を中心に戦後アメリカの学術研究資源体制は整備され、歴史にも興味深いエピソードが多数あるが、これは別稿に譲りたい。

［注記］本稿掲載以外の図書館の写真は、建築史家五十嵐太郎（東北大学准教授）氏主宰のフォト・アーカイヴに掲載してあるので参照願いたい[11)]。

１）Association of College and Research Libraries. <URL:http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/index.cfm>

２）Association of Research Libraries. <URL: http://www.arl.org/>

３）<URL:http://www.carnegiefoundation.org/classifications/>

４）The Independent Research Libraries Association. <URL: http://irla.lindahall.org/>

５）菅谷，明子．2003．未来をつくる図書館:ニューヨークからの報告 . 東京 : 岩波書店 .

６）松林，正己．2007．図書館はだれのものか：豊かなアメリカの図書館を訪ねて．春日井市：中部大学（販売　風媒社）．

７）<URL:http://www.grandcentralpartnership.org/what_we_do/beautify_library_way.asp>

８）Stoppard, Tom. 1979. Night and day: a play. New York: Grove Press.

９）Ardizzone, H. (2007). An illuminated life: Belle da Costa Greene's journey from prejudice to privilege. New York: W.W. Norton & Co.

10）<URL:http://www.library.yale.edu/beinecke/index.html>

11）Photo Archives 54
<URL:http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2005/04/08152632.html>
Photo Archives 90
<URL:http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2008/03/31203857.html>